

「これが私たちの『南アルプスの教育』だった」

～「文化財課」との継続的協働教育活動の実践～

「私は歴史に興味があったけど、お話を聞いて歴史がさらに好きになったし、南アルプス市という市がとても好きになりました。」（南アルプスの教育より児童の声）

南アルプス市立若草小学校
澤登 一浩

1. はじめに：「これが私たちの『南アルプスの教育』だった」

子ども達にとって学びの必然性を身近な事象・歴史的資料に直接触れることに求め、その価値を感じ、更なる学びへと発展・深化させていこうとする試みは珍しいことではない。なぜなら、そのような学びは、最も子どもにとって有意味なことであり、郷土を理解し、愛することに繋がるということを教員はみな、知っているからだ。これは本市の教育方針とも合致する。だが、それは必然的に、無償でしかも専門知識を持った人々や組織（地域や行政）の協力なしにはなかなか実現しない。さらに難しいのは、そのような地域にまつわる事象や歴史的資料が身近に実在し、教員自身も興味関心を持ち、授業づくりへの意欲を駆り立てるものでなければならないということだ。実は、南アルプス市には、すでにこれらの要素を全て備えた環境があり、学校でも、実践もしていたが、そのような豊かな学習環境がまれであることに気づけなかった。

本実践報告は、この「南アルプスの教育」、具体的に言えば市教育委員会・文化財課スタッフと協働/協同し、「地域の遺物や歴史」を材料として、全小中学校生と地域を巻き込んで実践した一連の学習活動を報告し、その意義と可能性を提示するものである。

簡単に経緯を紹介したい。実は、現文化財スタッフは市合併前から各市町村に眠るお宝を探し、それを記録に残す仕事をしていた。発掘の「プロ」が手がける内容も多岐にわたっていたが、その一つひとつが以前から埋蔵文化財を環境教育と関連づけ授業作りをしていた私にとって、関心のあるところであった。当時から現スタッフの一人から情報をもらったり、同時に学校現場のニーズに対応できるような資料や、体験活動を要望し実現してもらったりしていた。そんなこともきっかけとなり、文化財担当の仕事のバリエーションも広がりを見せてきたように思う。学校現場から、南アルプスの「発掘」とはなにをと問うならば、それは、文化財課が掘り出したもの（記録や遺物）から、子ども達の学びにつながるもの、生かせるもの、深められるものを見だし、アレンジし使えるように作りあげることではないかと考える。

南アルプスの教育の特色は、文化財課スタッフと教師一人一人とのキャッチボールから作られる授業の積み重ねから生まれる。それは、他では類を見ない地域性に富んだ教育活動であり、文化財課と教師のそれぞれの「発掘」作業だった。現在当たり前のように私たちは、井戸を掘る（発掘する）文化財課と一緒にあって、この地ならではの授業

作りをすすめている。しかしそれは他地域からすると決して当たり前のことではないことに気がついたのである。

県内外の教育関係者が集う研究会等で、市内各小学校が取り組んでいる実践を紹介すると、一様に「どうしてそこまで行政機関である文化財課と一緒に活動できるのか」との、質問を多くいただいた。聞けば、「博学連携」が推奨されてはいるものの、互いの敷居の高さがじゃまをして、どうしても互いの連携がうまくいっていないのが現実のようだ。私たちは気づかなかった。南アルプス市政誕生から12年も経過し、各学校の各学年のニーズに応じ資料提示や、出前授業を行ってくれた市文化財課の当たり前のように対応してくれた活動と思いに・・・。

今振り返れば、文化財課と連携した授業作りから「南アルプス教育」が築きあげられてきたといっても過言ではない。南アルプス市の特色ある教育活動は、市内の各学校が各地域にしかない文化財を使いその価値を教育活動に活かすこと、我が学校区にある子ども達の生活エリアにある貴重なお宝を使って、より興味関心を抱き、学習の必然性を感じながら取り組む教育活動である。

今回、市内各校で行ってきた授業実践のいくつかをレポートをまとめてみた。この実践以外にも、文化財課の資料にある出前授業をした記録を見ると、数多くの市内各校の積み重ねられた授業実践が有る。本年度、このレポート提出を期に、南アルプス市内の学校現場から、誇りと自信を持って「南アルプスの教育」をさらに作り上げていきたいと思っている。

2. 南アルプス市教育委員会文化財課とは

芦安村、八田村、白根町、櫛形町、若草町、甲西町が合併し「南アルプス市」が誕生して今年で12年である。高校の地理でも紹介されてきた「御勅使川扇状地」の上にもそのほとんどがあり、太古より暴れ川と称される御勅使川の氾濫で、人々の生活の営みの乏しさが予想され、埋蔵文化財への関心も薄い地域でもあった。それが、中部横断道路の建設に伴う事前の発掘調査がきっかけとなり、旧町村に文化財担当の専門職員が配置され試掘等が本格的に行われるようになった。そこで発見されたものは、各地域の歴史教科書を大きく塗り変える「革命的」な見直しを迫る内容のものだった。そして、合併を契機に町村にいたスタッフが一つとなり市全体の文化財を担当する「文化財課」へと発展していった。

今では、全国でも有数の「縄文王国」と言われるほど、時代を大きくさかのぼっての貴重な遺物等が発見されている。そのような、南アルプス市のお宝探すと、それをどうしたら地域住民、その中でも地域の未来を託す子ども達に分かりやすく、そして、自分たちの住む南アルプスが好きになってもらえるか、常に考え学校現場に提案してくれるのが、私たちの文化財課である。

ここに興味深いデータがある。

○「山梨好きですか？」との問いに、

- ・山梨県が好きな県民の割合 ー 43位 (県外者24位)
- ・山梨県に住みたい県民の割合 ー 43位 (県外者27位)

出典：日経リサーチ「地域ブランド戦略2013」

○田舎暮らし希望地域ランキング

2014年ランキング：1位山梨県、2位長野県、3位岡山県

2013年ランキング：1位長野県、2位山梨県、3位岡山県

2012年ランキング：1位長野県、2位岡山県、3位福島県

出典：NPO法人ふるさと回帰支援センター

このミスマッチは何を意味するのだろうか。

山梨大学の秦 康範 准教授は、

- ・「今までは、自分たちの住む地域の良さを学ぶことなく大人になり、都会に出てそのまま故郷に戻らないという状況があったのではないだろうか」と。

まさに、文化財課の取組から南アルプスから地方創生の流れをとの想いも感じられる。

現在、文化財課には常駐専任スタッフが3名いる。田中さん、斉藤さん、保坂さんである。皆、学芸員の資格を持ち、そのうち1人は教員資格も持っている。地域の宝（文化財）探しに情熱を持ち、その活用を未来への「みちしるべ」にできるような活動を日々行い、我々小中学校教員と常時、市役所、小学校、屋外など定期、不定期に話し合いを持っている。彼らは教育、啓蒙活動にも熱心で、出前授業や地域へ出かけての講義などを行い、プレゼンテーション力、子どもとのコミュニケーション力においても抜群のものがある。必要があれば、市のバスを調達し、自らガイドとして積極的に教育に関わってくださる。また、文化財課は自前の「ふるさと伝承館」を持ち、管理・運営をしている。ここでは地域から発掘された遺物等が時代ごとに展示され、児童、生徒や地域の学習施設としての機能を持つ。また、火おこしや縄文クッキー作り、縄文人の生活体験学習なども行っている。そして、その発展として、県立考古博物館の見学・学習へとつなげている。規模は小さいが、世界の博物館と引けをとらない機能と存在価値を持つ、南アルプス市民の誇る文化財課である。

3 文化財課×教師のコラボした実践

3.1 瓦の歴史学習をとおして

生活科の学校探検、社会科地域学習・道徳授業の手作り教材に「地域の鬼面がわら」が・・・。



若草地域の小学校屋根部分に設置された「鬼面がわら」は、かつて栄えた若草・加賀美の瓦産業の勢いを彷彿とさせるレリーフとなっている。

現在修復が進められる甲府城の屋根瓦も、この地域から製造された瓦だとの研究もある。その鬼面がわらの歴史を、新たな古文書発掘と共に、その学校が存在する地域と結びつけ子ども達にとって誇りにできる学

習資料として準備し、毎年何回かの出前授業を行ってくれているのが南アルプス市の文化財課である。

さらに、「鬼面がわら」の歴史とそこに生きた身近な人々の生き様を知りたいとの学校現場の要望に対し、生活史に視点を変え、新たな資料と心にしみいる先人の生き様を紹介してくれるのも文化財課である。以下は文化財課の田中さんとの日々の会話の一例である。

「田中さん、学校の屋根にある様々な表情の瓦は、何を意味しているのでしょうか。」

「田中さん、どうして私たちの学校には鬼面がわらが屋根にあるのでしょうか。」

「田中さん、屋根を葺く仕事をしている人は今もいますが、どんな歴史が有るのですか。」

「田中さん、地域の産業を最後まで守ろうとした人の様子を教えてください。」

学校では、自分たちが住む郷土に対し関心を持ち、更にそこから広い世界に目を向け学んでいくきっかけを授業の中で作るために、この「郷土の鬼面がわら」から、学校と文化財課と上記のようなやりとりが行われている。

1年生の授業であるが、学校探検は、校舎屋根付近に着いている様々な表情をしている面（瓦）の発見から始まる。そして、それがどんなもので、何を意味しているのかという予想から授業が展開されていく。その中で、若草地区の瓦作りの歴史に詳しい文化財課の田中さんが登場する。瓦とは何なのか、鬼面がわらにはどんな意味があるのか、私たちの生活とのつながりを分かりやすく話してくれる。そこから、瓦作りが有名な地域にある自分たちの学校が、地域のどんな願いが込められて作られたか考えていく。

3年生になるとその学習は地域学習へとつながっていく。学区を含め隣接する地域で地場産業として古くから栄えてきた瓦作り産業があるが、授業ではその歴史と身近な先人が営んできた生活の様子を学ぶ。文化財課の田中さんが授業でも深く関わり、古文書から分かってきた瓦作り産業の広がり、今でも残る歴史的な建造物との関わり、さらに時代の変遷と共に瓦産業がどのように変わってきたのかなどを説明する。また、地域産業を守ろうとした人々の姿を、教師の授業作りからのニーズに応え資料提示と、子ども達への分かりやすい説明を行ってくれる。

そして、瓦会館見学と3年生の図工で作る鬼面がわら作りの創作活動へとつながり発展していく。現在では、市内外の小学生が地場産業の学習でこの瓦会館を訪ね鬼面がわら作り体験を行うようになっている。

このような一連の流れを作るには、何度となく打ち合わせを重ねるのは当然だが、普段からの交流や永い協力からできた信頼関係が必要であることは言うまでもない。



<子ども達が作った鬼面瓦>

3.2 道徳の学習

地域の瓦作りに関し、文化財課からの人的な発掘資料を基に、最後まで守り通した女性の瓦作り職人の思いを自作の道徳教材とした道徳の学習がある。

第3学年 道徳の学習 を例にして

- 主題名 「若草の鬼面瓦」 内容項目 4－(5) 郷土愛
- 資料名 加賀美瓦の歴史 読み物教材「女が守る加賀美瓦」(自作教材)
- 主題について

3年生の社会科の学習では地域調べをする。地域の建物や産業、土地の利用の仕方などを学習し、自分の住んでいる地域がどんなところか理解していく。子どもたちは、地域のことを知るによって、より地域のことに関心を持ったり参加したりしていくようになる。地域への関心の広まりの時期に、地域の伝統や文化に関することを学ぶことで、自分の住んでいる地域を愛する心を育てていきたい。今回は、若草地区の特産である「鬼面瓦」を題材に取り上げ、その歴史や伝統を守る人の気持ちについて学び、郷土への思いを高めていく。

- ねらい

若草の瓦づくりの歴史を学んだり、瓦造りの伝統を守る人の話を聴いたりすることを通して、地域の文化や伝統に親しみ、大切にしようとする心情を育てるとともに、郷土を愛する心を育てる。

- <道徳の本校オリジナル読みもの資料をつかって>

・・・女が守る加賀美かわら・・・

昭和六十一年(二十四年前)になると、たくさんあったかわらづくりの店は仕事をやめていきました。あとをつぐ人も少なくなり、材料のねん土も近くでとれなくなり、大きな会社が売る安い商品がたくさん出回るようになったのがその理由でした。その中で、たった一けん残ったのは、神山とめ子さん(五十八さい)の店でした。だんなさんが亡くなって以来、女の人一人で、かわらをつくりつけていました。毎月一回、三千枚のかわらを一人でつくります。群馬県から、材料のねん土を買って、きかいを使って土をねり、プレス機を使ってかたちをつくり、それをかわかして、かわらをやきます。



瓦づくりはもともと、力のある男性がしていた仕事です。神山さんもつらく感じることもあります。三千枚のかわらを一人で運びます。かまで、瓦を焼く時は、できあがるまで、まる2日間かかります。その間は、夜も眠らずに、十五分おきに、かまの火かげんをみなくてはなりません。心も体もくたくたになるそうです。(オリジナル道徳読み物教材)

実は、地域の産業史としての瓦づくりを、物や事象だけではなく、誰がどのようにして行ってきたのか、そんな、人物とその生活も文化財課は私たちに情報提示してくれているのだ。

3.3 社会科での実践

4年生の授業は、歴史を通して考えものである。4年生では、もう少し広域な場所との関わりでこの地域がどのような特色を有しているのかを追求する授業づくりに、社会科・総合、そして、道徳にも文化財課スタッフに関わっていただいている。教師がその構想の段階から文化財課と情報はもちろん、授業作りのアイデアに関してキャッチボールを繰り返し行った授業でもある。

- ・「田中さん、浅原村の歴史を聞いたことがあります、もう少し詳しく教えてくださいか。」
- ・「田中さん、関係する場所に一緒に行っていただき、子どもに説明してもらえますか。」
- ・「田中さん、移転しなくてはならなかった人々の思いを考えたのですが、資料から見るとどうなのでしょう。」

など、教師と文化財課田中さん、児童と田中さんという関係で授業が作られていく。そして、更なる試みとして、教師の問題意識と、関係する教師所有の資料とを結びつけ、道徳教材にも発展させてみた。

4年生社会科での実践である。

調べて考え、表現する社会科学習をめざして
～「昔から今へと続くまちづくり」浅原村移転の謎を追って～

○ 単元について

時代をさかのぼって、過去から地域を見つめ直し、昔から、多くの人たちが地域のために働き、苦勞してきたことを学んでいく。

現在子どもたちが住んでいる若草地区の東端には、釜無川（富士川）が南流している。山梨でもっとも大きな川であるこの釜無川は昔からたびたび大洪水を引き起こし、氾濫を繰り返してきた。この氾濫を繰り返す釜無川を治めるため、武田信玄が「信玄堤」を完成させた。これによりマイナスの影響を受けた場所も多くあった。その一つがこの若草地区（特に浅原地区：過去、浅原村と呼ばれた）である。1586年から1622年の36年の間に3回も集落を移転しなければならなかった。その後も何度も水害に苦しみ、1642年には、釜無川の対岸にある、東花輪村の西河原という場所に「仮住まい」を余儀なくされてしまう。江戸時代に釜無川の整備が進みようやく現在の場所に河道が定まったところで、1791年に現在の場所に浅原村が移転し、地域発展の基盤が築かれた、という。釜無川の流れに翻弄され、実に150年という長い時間、「仮住まい」をしていた地域なのである。その後も水害から完全に解放されることはなく、1802年に幕府より、水害時の避難所として「避水台」が造られた。明治時代にも大きな洪水が起こり、後世にこの水害を伝える「水害図」を浅原地

区より下流域の南湖地区の人々が残している。今でも毎年、地域の人たちにより避水台で「水防祈願祭」が行われている。

以上のような、釜無川の流に翻弄された地域の先人たちの努力と苦難の歴史を、地域の史跡を巡ったり、田中さんの話を聴いたり、過去の資料を見たり、触れたりすることを通して、追求し、学びを深めていき、身近な地域社会に対する誇りと愛情を育てるとともに、防災に関して関心を持ち、万が一の際には積極的に身を守ろうとする意識を育てている。



<田中さんと「避水台」から釜無川を望む>

- 発展して道徳の授業（オリジナル読みもの教材を作って）

あさばら

<読みもの教材「あばれ川と たたかった村 浅原」>・・・別紙資料添付

3.4 南アルプス市内めぐりを通して・・・

校外活動として市内めぐりには、各小学校がある地域ごと自慢できる貴重な文化財を中心に文化財課の田中さんのバスガイドによって巡るツアーが定着している。（田中さんに限らず、3人が都合を調整し同行してくれる）後述するが、6年生の歴史学習としての地域巡りとは別の、3・4年生の地域学習の目的を教師と共有しての校外学習である。

そこには、日本で初めてコンクリートで作った芦安小学校区の「芦安堰堤」、高校の地理教科書に登場する「御勅使川扇状地」の御勅使川（暴れ川）地域、八田小学校区、百田小学校区、源小学校区にある史跡武田信玄の（と言われている）「石積み出し」や「将棋頭」の史跡、飯野小学校区の戦争遺跡「ロタコ」、小笠原小学校区にある、その学校名にも由来する「小笠原家」（今に受け継がれている小笠原流礼法）の史跡、城跡、甲西地区の小学校区にある、縄文王国と言われる有名な遺跡の数々等、次々と発掘されその歴史的な価値が評価されるに至ったものを見て回り、触れて回り、作って回ることができる。

地域学習を通し、社会科・総合に限らず、道徳の授業にも活かされている。文化財課の発掘は物だけではなく、歴史の語り部であったりもする。教師と語り部との橋渡しもしてくれ、授業でねらう内容を直接体験者から聞くことができ、子ども達は生き証人から生の歴史を学んでいるようである。



<子ども達が紹介する看板>



<古墳の見学>

甲西地区の小学校区にある、縄文王国と言われる有名な遺跡の数々等、次々と発掘されその歴史的な価値が評価されるに至ったものを見て回り、触れて回り、作って回ることができる。また、史跡近くの小学校で、史跡を紹介する看板作りとその設置もこの学習の発展として進められており、そこを訪れる子ども達にとっても親近感を覚えるものとなっている。



＜文化伝承館で縄文クッキー作り体験＞

3.5 修学旅行の事前学習・歴史学習を通して・・・

南アルプス市誕生以前から、旧楡形町小笠原小学校の小笠原という名称に関しては広く知られるところだった。現在の南アルプス市を含めた範囲で、甲斐源氏の流れをくみ、鎌倉時代には幕府直近の家来としてその存在を示し、武士の作法を形作った小笠原流礼法発祥の地がもととなり地名および学校名がつけられたと言われる。さらに、南アルプス市となり、文化財課の更なる歴史資料の発掘および研究が進められてきた。その成果が徐々に私たちの目にもとまり、「鎌倉」をキーワードに毎年実施している小学校6年生の修学旅行の事前学習および歴史学習への関わりで文化財課との連携が多くなってきた。修学旅行が近づくと私たちは文化財課の保坂さんとこんな会話を交わす。

- ・「保坂さん、甲斐源氏から鎌倉武士、そして、今に伝わる小笠原流礼法について、先生方の研究会でお話してくれませんか。」
- ・「保坂さん、鎌倉時代に関係ある市内の史跡や鎌倉幕府と繋がりのあるお話を、6年生にしていただけませんか。」
- ・「保坂さん、小笠原流礼法と今の私たちの生活との繋がりを教えてくださいませんか。」

現在市内各小学校の6年生が、「鎌倉と南アルプス市」「今に伝わる小笠原流礼法」について修学旅行の取組と絡め、社会科、総合で学習を行っている。そして、その内容も、学校ごとに身近な資料を探し、より興味や関心をもって学べるようにと文化財課が準備、授業のサポートをしてくれている。更に、市誕生以降の文化財課の尽力で、古代の埋蔵文化である遺跡・遺物が数多く発掘され、国内でも有数の縄文文化が分かってきた。本市が「縄文王国」とも言われるようになってきた。妊婦を型どった埴輪が大英博物館等、国外の博物館にも依頼され出展されるほどで、貴重な発見がこの地に生きる私たちの誇りともなっている。

地域の未来を託す子ども達にそれを伝えたいという文化財課の思いが、地域の歴史学習を通して子ども達、そして、教える教師にも響いてくる。教師も、できるだけ地域に出て、身近な歴史から6年生の歴史学習を展開しようとしている。また、博学連携が言われるが、市内の多くの6年生は文化財課スタッフに引率を依頼し、市内各遺跡の見学、文化財課が運営する「ふるさと伝承館」で時代ごと整理展示されている遺物等を通しての学習、また、火おこしや縄文クッキー作り、縄文人の生活体験を行っている。そして、

その発展として、県立考古博物館の見学・学習へとつなげてみいる。

3.6 この学習を通して、子どもたちの感想。そこから見えるもの・・・

これらの活動を通して子どもたちがどのように感じているか、子ども達を書いた感想がある。主なものをそのまま抜粋した。教室での学習が、子ども自身が地域や家族を巻き込んで、大きな発展学習とつながっていることに気づく。そして、このような学習形態が子ども達自らがもっと知りたいという、知的欲求を駆り立てていることが分かる。自立学習、アクティブラーニングが、自然発生的に生まれているのだ。教師は、資料や方向性を示す。それを学習者が自らの想いで自らの学びと発展させていく。このようなわくわくする学習経験を小学校時代から日常的に積み重ねることが、自ら学ぶ人間を作ることだと思う。

- ・このあいだ、とくしませぎ、将棋がしら、石積み出しなどについて教えてくれてありがとうございました。最初、とくしませぎの水を取り合っていたと聞いて、びっくりしました。水は、昔のほうがかたいと知って、初めて水のありがたみを知りました。昔は、今みたいに水も少ししか流れてないと知りました。でも、昔の人達はトンネルの下から来て水を止めたり先を読んで水を止めたりして、頭がいいと思いました。石積み出しも、みんなで手をつないで、上から下まで一列になるほど長くて高いものでした。(4年)
- ・動画などで分かりやすく教えていただきありがとうございます。僕は御勅使川(みだいがわ)のことがよく分かりました。川が氾濫しないよう、その止め方なども詳しく説明してくれてよく分かりました。御勅使川は家から近いので、たまにその様子を見に行こうと思いました。(4年)
- ・今度家族で一緒に行ってみます。(4年)
- ・最初、僕はあまり興味がなかったけれど、見学で「昔の人の知恵は、すごいな。」「水害から村を守ったのはすごいな。」と、あらためて思いました。僕は、将棋がしらなどもっと調べてみたいです。(4年)
- ・「鎌倉と南アルプス市のつながりを知って、修学旅行を10倍楽しもう!」と書いてあったのですが、こんなに鎌倉幕府に関わる人がいてびっくりしました。特に、「八田牧」があったから馬を育てることができたり、そこで馬とふれあったから甲斐源氏の人是有名になって活躍したりしたんだと思いました。そこから有名な人がいっぱい出てきたから、もうちょっと「八田牧」という名前が有名になれば良かったなと思いました。甲斐源氏が治めた地が名字になっていることも分かりました。加賀美遠光さんは、とても弓がうまく、「鳴る弦の術」で天皇さんを助けてすごいなと思いました。特にすごいなあと思ったのは、小笠原長清さんです。南アルプス市と鎌倉に館を作っていたし、「弓馬の四天王」と呼ばれていたし、小笠原流礼法も教えた人だからです。この人についてもう少し調べてみたいと思います。(6年)
- ・遠光さんの息子(光朝さんと長清さん)や大弐局さんという人の活躍ぶりがすごいな

あとと思います。御所五郎丸はすごいけど、二人の兄弟の最後がかわいそうでした。南アルプスの人々がこんなに活躍していてすごいなあ后感心しました。これからもっと歴史を知りたいと思いました。(6年)

- ・僕は、鎌倉は山梨の南アルプスと関係があるなんて知りませんでした。歴史が苦手だったのに、ちょっと分かってきたかなあとと思います。これで、10倍も修学旅行を楽しめると思います。(6年)
- ・この前は、南アルプスと鎌倉とのつながりがあることが分かりやすく教えていただきありがとうございました。教えてもらったことを意識しながら修学旅行、鎌倉散策に行きます。特に、八幡宮で大銀杏のところまで想像したいです。(6年)
- ・私は歴史に興味があったけど、お話を聞いて歴史がさらに好きになったし、南アルプス市という市がとても好きになりました。私がお話の中で一番驚いたのは、山梨にも源氏がいたということです。源氏とはあまりゆかりがないと思っていたので、びっくりしました。話を聞いて修学旅行が楽しみになりました。(6年)

上記は子ども達の感想の一部だが、文化財課がキャッチフレーズとしている、

「ふるさとを好きになってほしいから」が、間違いなく子ども達の学びの成果となって現れており、さらには、個々の次への学習喚起へと繋がっていることが分かる。これは、極めて重要な事で、今盛んに言われている「学力」のベースとも言うべき、「学習意欲を育てる教育」の視点からも過小評価すべきではない。

3.7 学校発の地域防災教育の取組から・・・

これは、山梨日日新聞の記事の元になった資料である。『南アルプス市埋蔵文化財ガイドブック』第3集 Ver 3 に掲載されていた、富士川(釜無川)の大水害の資料である。これを元に学校発の地域防災教育に取り組んだ。もちろん、今回も文化財課とのコラボである。

以下は私と文化財課、斉藤さんとのやりとりである。

・「斉藤さん、新聞(山梨日日新聞)1面に掲載された文化財課が発掘したという水害図、どんな中身だったのですか。」

- ・「先生、この記述を見てください。『・・・後世の人々よ、・・・忘れないでくれ。』まさに100年前、この学校も含む地域で釜無川が氾濫し、もう再起などできないだろうと思われる状況の中、このような水害の歴史を後世に伝え、同じ苦しみを味わう人がいないよう、警鐘の言葉があるのです。」
- ・「斉藤さん、これって、まさに3, 11で言われていた『釜石の奇跡』で話題となった『津波てんでんこ』に似てませんか。」



・「先生もそう思いますか。私もこの水害図と文を読んだとき、体に電流が走ったような感じがしました。」

・「私も体が震えました。」

何があってもおかしくない気象変動、自然環境の異変等の中、私自身、この地域の水害の歴史を知ること、そして、先人の知恵から学び行動することが大事だと考えるようになった。そして、子どもの命、そして、そこに住む人々の命を守るため、この水害図から、積極的に学校と地域・家庭との繋がりが持てるような防災教育計画を立て、実践をしてきた。

○ 講演会の実施

文化財課斉藤さんによる、地域の災害の歴史と防災について2回の講演を行った。

(第1回講演会)

「今、ここに住む私たちへの、命を守るメッセージ！」

講師を務めていただいた文化財課斉藤さんには、文化財課が発掘した100年のこの地域の水害図からのメッセージと3.11の「津波てんでんこ」の共通している未来へ向けての警鐘について、釜石の資料を取り寄せて講演をして頂いた。

講演に向け、斉藤さんは実際に釜石に赴き「津波てんでんこ」の冊子を入手し、その話題にも触れ講演してくれた。学校の教員を退職し、震災前に「津波てんでんこ」の意義を明文化し冊子にまとめ、来たるべき時に備えるべきだと警鐘こ言葉を残し、3.11前にこの世を去った先生の冊子を手し、話をしてくれた。

(第2回講演会)

「自分の命を守る子を育てるために！」

広島集中豪雨による土砂災害の現場に親戚が居を構えていたという斉藤さんの講演は、昨年にして聞く人の心をつかんだ。

そして、それを、締めくくる形で、群馬大学の片田敏孝教授を迎えて防災への「心のスイッチを切らない」との話を頂いた。

そして、保護者と児童、保護者と地域の方々で災害図上訓練(DIG)を実施した。この取組それ自体と、それを通して地域防災に関し学校だからできることを文化財課と一緒に作ってきた。

3.8 環境教育を通して・・・

文化遺産を大切に活動が、即、それを取り巻く周辺の環境を見つめ、守ることに通じるとの見通しをもって、授業の計画を立てた。子ども達の積極的な活動、生きた授業を創るため、発掘など体験的な活動を取り入れ、文化的な価値を実感することから開始、そこから、児童の主体的な学習が展開されている。

文化財課の斉藤さんから常に発掘情報を入手。そして、子ども達の身近にある埋蔵文化財を体験発掘できるようにした。学校近くで工場の誘致に伴う調査発掘に子ども達が体験発掘させてもらった。子ども達の発掘していたすぐ横から出てきたものは、人骨と、



珍しい銅鏡だった。

このような体験発掘も現在でもできる体制が整っている。当時の子ども達の感動が、学びの深まりへと繋がり、また、自分たちの住む地域に誇りを持つことになっていった。

このような文化財課と学校のコラボした取組から、現在では、市内各所の調査発掘の後の遺跡には、埋め立てられたり、壊されたりした遺跡や遺物が存在した場所を紹介するアナウンスに、子ども達の声が使われ、「Mナビ」として活躍している。また、文化財課が紹介する市の広報誌にも、子ども達が各文化財とふれあう場面が多く掲載されている。

3.9 平和教育を通して・・・

戦後71年、ますます戦争を直接体験した世代が減っていく。そのような中で、今のうちに戦争の記憶を直接聞く機会をと、各校では平和教育を進めている。文化財課では、市内の戦争遺跡の発掘と共に、戦時中のアルプス市を知る語り部探しにも余念がない。平和教育の授業づくりを私たちは文化財課と相談するが、そこには、ほしい情報と共に、身近な足元に貴重な平和を考える題材がたくさんあることを気づかせてくれる。この8月も約1000名の教職員研修会で、文化財課から紹介いただいた市内在住の戦争体験者を迎え、斉藤さんをコーディネーターに平和に関する講演会を開催した。

4. 地域と連携した伝統的な行事を、更に深めるために

南アルプス市の由来ともなる、南アルプスの登山口にある芦安の中学校。毎年、地域の方々の支援を受け南アルプスの山々へ登山を行っている。数年前、地蔵ヶ岳への登山に際し、地蔵ヶ岳の由来を調べる中、自分たちの地域にある地蔵に関する歴史的な意味と、そこに託す人々の願いを学ぼうと計画した。文化財課と連携し、地域の歴史と、残されている各種地蔵が何なのか学び、更に、仏像ガールなど、今風の仏像理解に触れながら登山前の学習を進めてきた。そして、かつてがそうだったように、自らが作った仏像を背負い、地蔵ヶ岳まで持って行き、山頂に奉納したという取組に、文化財課が最後まで関わっていた。

また、芦安の小学校では、一昨年ユネスコエコパークが認定される前、ユネスコスクールとして登録された。時を同じくして、芦安小学校の歴史の中で、戦前・戦中・戦後の日本経済を支えてきた、金・銅の芦安鉱山の歴史がクローズアップされてきた。認定される前、芦安小の6年担任が、総合学習で地域の歴史を村で調べ、鉱山に芦安小学校の分校があったことを授業でとりあげた。そして、その場所へ行こうと言うこととなった。それがきっかけとなり、もう少し詳しい芦安鉱山の歴史を文化財課が調べ、教職員との学習会、そして、鉱山までのルートの確認に、文化財課も関わってくださった。現在、戦争遺産としての位置づけと共に、近代の市の歴史を伝える文化財として調査も進んでいる。(南アルプス市立芦安中学校HP URL http://www.ashiyasu.m-alps.ed.jp/?page_id=3203 参照)

5. 本市オリジナルの心を育てる授業を通して

南アルプス市では、小笠原流礼法発祥の地として、心を育てる南アルプス教育の軸に「小笠原流礼法」を位置づけ、各学校の道徳で小笠原流礼法の授業を行っている。小笠原流礼法の歴史的な話を文化財課の資料から学び、市内各校では、小笠原流礼法＝「思いやりの心を形に表す」との教えを受け、子ども達が学び行動化しようと実践している。

6. まとめ

市内各校、上述のように地域素材を活かした学習では、文化財課と連携し継続した内容、また、新たな取組を文化財課に提案しながら積極的に授業作りを進めている。これだけ頻繁に文化財課と共に授業を行っているが、実は毎年各校で綴られる研究紀要（各校の校内研究のまとめ）の中に、文化財課と編んだ取組の記述はない。しかし、ある意味、特別ではない粛々として行われている普通の授業の中に、地域の貴重な文化財との出会い、地域から広がる更なる学習の機会が網羅されているように感じる。各校が特色ある教育活動をもって「〇〇小教育」とよく名付けるが、まさに文化財課とコラボしたこれらの教育活動は「南アルプスの教育」と言って良いだろう。

文化財課が昨年まとめた記録集の中に、次のような記述がある。

— 未来へ —

「将来、子ども達はこの地域を離れていくかもしれない。ただその場合には地域の誇りというものを持って旅立ってほしい。また、そこに残る子ども達も、ここに暮らしたことを誇りに思う拠点が必要だ。それが「史跡」であってほしい。そのために強制されるわけでもなく子ども達が史跡に集まり、知らず知らずに草をむしるような、そんな史跡を少しずつでも残していきたい。南アルプス市でも、こらからも続けていってほしい。

ふるさとを愛する人々によって魅力ある土地や地域が醸し出されていく。その歩みはゆったりではあるが、確実にずっと続いていく。これが文化財を守っていくことと地域を作っていくこと、振興させていくことの基本理念である。」

まさに南アルプスの子どもを前にして、教育現場の私たちが思う「南アルプスの教育」の理念もそこにあるように思う。だからこそ、今も、そして、これからも文化財課と一緒にあって、私たちの願い「ふるさとを愛し、世界に通じる子どもの育成」に積極的にしかも、楽しみながら関わっていきたい。

参考文献

南アルプス市文化財課 『山梨県南アルプス市 文化財年報』

南アルプス市文化財課 (2013) 「明治40年の水害と南湖むら水害図」『南アルプス市埋蔵文化財ガイドブック』第3集、第3版

山梨日日新聞 (2013.5.26) トップ「先人警句 100年前水害図に～慢心戒め『よく考え、よい方策を』」

南アルプス市文化財課 HP